



LGBTについて“まずは知る”ということを中心に、「LGBTという言葉を知る」、「当事者がなぜ生き辛いのかを知る」、「なぜ差別や偏見があるのかを知る」、「なぜLGBTは日常の中で見えないのかを知る」の4つについて、多くのLGBT当事者の方々と関わってこられたからこそその視点でお話をさせていただきました。

LGBTという言葉は昨今広く知られるようになってきたが、当事者に対してはいまだに「かわった性的嗜好(性的に興奮する趣味嗜好)」である人という解釈をされていることが差別や偏見に繋がっていること。また、性的マ

イノリティはLGBTだけではなく他にも多様に存在するため、これからはLGBTを含んだ総称である「SOGI」という言葉を知って正しい解釈を持ってほしいと伝えていただきました。

LGBT当事者が直面する困難として、自分自身を受け入れられない。本当の自分を周囲に出せない(周りに合わせて嘘をつかないといけず、カミングアウトできない)。自分の好きな人を自信を持って言えない。好きな性別の服が切れない。トイレなど男女別の空間を使えない。そこから自己肯定感が持てず、ロールモデルがないことから将来に展望が持てなくなり、不登校や自傷行為、自死を考えてしまうことがとても多いということ。その当事者の多くが自身のセクシュアリティ(自分は誰が好きなのか)を小・中学生の間に自覚し、悩みを抱えている現実を話していただき、だからこそ学校現場で教師や周りの生徒が理解を持ち、否定せずに受け入れられる環境を作ることが一番大切なこと。特別な子どもの問題ではなく、受け入れる周りの問題であることを伝えていただきました。

LGBTについてあまり出会わないという意見が多いが、それは性の悩みを持つ人が周りに「いない」のではなく「見えていない」だけ。当事者が「言えない」だけであって、いないと決めつけないでほしい。それはカウンセリングや心療内科との相談でも「言えない」くらいとても大きな悩みであり、伝えるのにとっても勇気が必要なこと。その原因は歴史的な背景から今も残る世の中のLGBTに対する無理解からの差別や偏見の目。自分の家族や友人との関係が崩れてしまうことへの恐怖。自分の居場所がなくなることへの恐怖であること。その恐怖を和らげ、少しでも悩みを持つ当事者が相談しやすい環境を作るためには、悩みを聞き出そうとするのではなく、LGBT理解の象徴であるレインボーマークを示し、性的マイノリティに理解があることを悩んでいる当事者にわかるようにしていく必要があると話していただきました。

LGBTで悩む子が相談しやすい環境作りとして、今教育現場でできることは、教職員が理解を持ち正しい知識を向上させること。性の多様性を教える授業に取り組み、関連本を設置して情報提供の場を設けること。男女別に指導している内容、更衣室、トイレについての見直し。などがあるが一番は先生がまずは当人を認め、よき理解者になってほしいと話し、当事者を特別扱いするのではなく普通にみてほしい。それらが当事者の自己肯定感を育み、まだ見ぬ才能の開花につながり、人生が変わる大きなきっかけにつながると話していただきました。